



読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

若かったあの頃

金沢医科大学 肝胆膵内科学 土島 睦

平成29年1月に石川県知事自ら『イクボス宣言』し、2月には金沢イクボス企業同盟が発会したというニュースがありました。イクボスとは部下の子育てや介護に理解のある上司のことで、『ワークライフバランス(仕事と生活の調和)』という言葉とともに、最近よく耳にするようになりました。イクボス宣言によって男性が積極的に育児や家事に参加できる環境となり、職場では当たり前育児休業を取得できるようになるのです。そして、夫が「イクメン」や「カジメン」となることで、女性がキャリアを諦めることなく仕事を続けることができるようになるのです。

私の研修医時代は女性医師が1割ほどと少なく、白衣を着て聴診器を持っていても、医師としてみられることは少なく、「そのお姉ちゃん！」と声をかけられたものです。さらに、その当時の職場にはまだ封建制度が蔓延しており、教授に「カラスは白い」と言われれば賛同しなければならない風潮が少なからずあった時代で、1986年4月から施行された男女雇用機会均等法なども無縁な職場でした。よって規則上は産休制度がありましたが、実際は医局の状況によって決定されていました。私は研修医1年目で出産をしましたが、妊娠9か月までは通常勤務で、もちろん週1～2回の当直もこなしていました。研修医という立場であったため、産後は4週間で職場に復帰し、義理の母の支援もあり研修医をどうにか終了することができました。その後、消化器内科に入局をしましたが、当時の医局長はイクボスであり、当直免除や夕方5時帰宅を容認してくださいました。これにはワークライフバランスを実践していた先輩女性医師がいらしたからです。医局の飲み会や学会などに子供を連れて行くこともでき、日直での仕事や実験の際には、上司が子供の面倒をみてくれました。当時は仕事の時間は夕方5時までと限られていたため、朝から頻りに時間を確認しながら計画的に仕事をこなし、患者さんの診察をしつつ、冷蔵庫のなかの食材を思い出し、夕食と翌日の弁当のメニューを考えるという状況でした。本来は綺麗好きですが、子供が小さい頃には掃除は2週に1回ほど、部屋は足の踏み場もない状態で、足で物を蹴散らし座る場所を確保し、洗濯物の山から着る服を探すという状況でした。職場でも家庭でも常に時間に追われる生活でしたが、私が仕事を続けることができたのは、まず上司に恵まれていたこと、職場の仲間たちのサポートがあったこと、自宅から夫の実家、職場、保育園や小学校と全て車で10分以内に移動できたこと、そして一番の助人である義理の母と文句一つ言わずにじっと辛抱を続けている(現在進行形)夫のおかげです。

同期にどんどん遅れをとり、焦ったり、落ち込んだりしたことや仕事を辞めようかと考えたこともありましたが、「時間がかかっても目標に到達すれば結果オーライ！」と考え方を切りかえたことで気持ちも楽になり、新たな事を学ぶ喜び、手技を習得する楽しさを感じながら仕事を続けることができました。徐々に女性医師も増え、男性医師と助け合いながら仕事をしていく時代となってきています。今後は女性医師のため、就労環境を整えることや就労支援、『イクボス』育成などのお手伝いを行っていくつもりです。